

【経営に合わせて栽培技術を選ぶ（1）】

「日本の栽培技術のレベルは低い！」などと書くと、多くの方からお叱りを受けるかもしれない。以前、本誌の昆編集長がここ数十年に先進国の中で収量の伸びが止まっているのは日本だけだ、という内容の記事を書かれていたが、私自身はかなり納得できた。その通りだと思う。

ただし、日本には優れた栽培技術がないとも思っていない。なぜ、優れた栽培技術があるにも関わらず、実際の農産物の生産という現場で活かされていないのか。

栽培

技術が普及していてもレベルが高いとは限らない

先の質問に、「収量は低くても、品質は最高だ」という反論もあるだろう。しかし、日本の農産物は品質もさほど高くないと感じている。確かに他国の農産物と比較すると、見た目が良く、選別が厳しいために形や大きさが揃っていて、そして包装も完璧に近いのだが、中身については疑問符が付く。粗放的といわれる他国の農産物は、見た目が揃っていないし、包装は最低限でも、食味が良かったり、棚持ちが良かったりするのだ。

なぜなのだろうか？ まず、いわゆる発展途上国に行くと、農家の方々の眼の色が違う。何としても、

もっと収量を上げて収益を得ようとする気持ちが非常に強い。翻って、日本では技術の話をして、あまり興味のない反応が返ってくるが多い。姿勢からして違うのだ。日本で盛り上がるのは農政の話である。

日本の栽培技術が進んでいると勘違いされている理由は、日本が先進国で一通りの資材も、栽培技術も普及しているためではないだろうか。発展途上国では農業資材も手に入りにくいし、栽培技術の情報も少ない。だからこそ栽培技術の話になると眼の色が変わるのだと思う。

また、日本では長年様々な栽培技術の追求を行なった結果、もうやり尽くしたと考えている方が多いせいもあるだろう。収量がそうそう簡単には上がるはずはない、品質がこれ以上良くなるはずはないという諦めに似た思い込みがあるのだ。そのためいろいろな話をして、困っていることがないように見受けられるケースも多い。しかし、よく話をしてみると、気づいていないだけで、改善できることは山のようにあったりするのだ。

最も分かりやすいのは、「天気が悪いと取れないのを何とかしてほしい」という例。これは、たいていの場合、相談されもしない。天気が悪ければ、取れないのが当たり前だと

岡本 信一 Shinichi Okamoto

1961年生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業後、埼玉県、北海道の農家にて農業研修。派米農業研修生として2年間アメリカにて農業研修。種苗メーカー勤務後、1995年 農業コンサルタントとして独立。1998年(有)アグセス設立代表取締役。農業法人、農業関連メーカー、農産物流通企業、商社などの農業生産のコンサルタントを国内外で行っている。講習会、研修会、現地生産指導などは多数。無駄を省いたコスト削減を行ないつつ、効率の良い農業生産を目指している。

Blog : 「あなたも農業コンサルタントになれる」

<http://ameblo.jp/nougyoukonnsaru/>

PROFILE

技

術を追求する方向をもっと作物に向けよう

さて、日本の栽培技術レベルが低

思われているためだろう。好天の年よりも取れるようにはならないが、減収幅を抑えることは可能である。天候不順で取れないのは農業において最も困ったことだと思うのだが、日本では常識化しているために、それを困ったこととは認識していないのである。無理難題をふっかけられるのが現場の農業コンサルタントなわけで、無理難題だと思っても相談してほしいものだ。

いという話に戻ろう。原因は色々と考えられるが、最も大きいのは栽培技術を追求する方向が間違っているせいではないだろうか。日本人の美德でもあると思われる、栽培に対する思い入れが非常に強い方が多い。海外では日本人のように土壌や自らの農産物に対して強い思い入れはない。実は、その思い入れが強すぎることによって、悪い方向に向かっていくのかもしれない。

例をいくつか挙げてみよう。決して揶揄しているのではなく、過剰な思い入れによって視野が狭くなってしまうがちなケースを取り上げているので、誤解の無きようお願いしたい。

まずは、土づくりに熱心な人。「農業の基本は土にある」ということで、堆肥づくりや土壌微生物の活動、微量元素といったことにハマり込んでしまうケースも見受けられる。

続いて、大型化を目指し、経営の効率化を図る人。特に野菜などの大規模経営の場合、栽培コストの中でも人件費の割合が高いために、最少の人員で切り盛りしようとしてしまう。同じく、機械化によって効率を上げようとするのも多い。

そして最も多いのが、様々な資材や技術を試して、常に新しい技術を取っ替え引っ替え導入し、技術向上

を目指しているケースである。

どれも、悪いことではないどころか、栽培や経営にとって非常に重要な要素であるが、栽培という観点から見ると、最も気を遣うべき主役が別にあると思うのだ。

それは、作物である。作物に気を遣うのは当たり前ではないかと思われるかもしれないが、実際には実践できていないことが多い。作物が取れなければ経営が成り立たず、安定して高収量・高品質の作物が収穫できれば経営にとって非常に大きなプラスとなる。しかし、意外なことに栽培技術の個々の部分について思い入れがあるわりに、作物に対しては淡白なのだ。

土

づくりの真意は 土壌を維持すること

先の例から考えてみよう。土づくりは確かに重要だが、土をつくることは言葉ばかりで、実際には土壌を維持することを示している。土づくりという言葉からは土壌を良くしようというイメージを抱くのだが、文字通りの土づくりを行なおうとすると、元の土壌を根本的に変えるということになり、時間もお金もかかってしまう。実際には土壌が劣化するのを防ぎ、土壌を維持するための作業を土づくりと呼んでいるのだ。

なぜ、土壌の維持を図るのかといえば、長年にわたって安定的に作物を育てるためであり、作物にとって不具合がなければ基本的に問題はな

いと思う。今年、「ソバを栽培するためにはどのような土づくりをすれば良いのか」という相談を受けたのだが、私の第一声は、「何もしなくてもいいんじゃないですか」だった。その理由は、ソバというのは基本的に他の作物も作れないような劣悪な条件下でも栽培できる作物であり、いわゆる良い土壌を必要としないためである。あえて、土壌を「良く」する必要はなく、維持する努力さえすれば十分。もちろん、排水など最低限の努力はすべきだが、それとて、経済性を考えて行なうべきだろう。

ひとつ書いておくと、土壌を維持するために最も避けるべきなのは、圃場を裸の状態で放置しておくことだ。日本ではあまり問題になっていないが、何も植えていない裸の畑は浸食されやすい。圃場を裸にしておくと日本は雨が多いので土壌が雨で流されるし、太陽の直射を受け温度変化も激しく、土壌の腐植を消耗させてしまうためである。浸食によって表土がなくなると、土壌の維持どころではなくなってしまう。特に傾斜のある圃場では、当然注意しな

ければならない。

ギリシャや北アフリカが、かつてローマ時代に穀倉地帯であったことをご存知だろうか。塩類集積といった問題ではなく、土壌が侵食されて表土がなくなってしまうためにも毛の土地になってしまったのだ。

裸で放置しなければ、日本の場合にはかなり土壌の劣化を防ぐことができる。堆肥づくり、土壌改良資材の投入、微生物の繁殖といった細かいことに比べれば、畑に何かを植えておくというのは根本的な話だが、盲点になりがちである。

ソバの例は極端であるが、土づくりとは作物に合わせる行なうもので、「良い土壌」という明確な基準がない目標を目指すよりも、今ある土壌を活用して最大限の収量を得れば良い、という見切りをつけるべきなのだ。強調したいのは、栽培で重要なのは作物を育てることであって、土づくりではないということである。なかには、有機物還元のための堆肥づくりが目的化してしまっている方も見受けられます。堆肥に関しては、以前にも書いたように未熟な堆肥の投入による栽培の障害さえ起こっている。あくまでも、土づくりは、作物づくりのためのステップに過ぎないのである。

(次号につづく)